F-15

近代・静岡県伊東における地域構造の変容に関する研究
ー旅館分布の変化に着目してー
THE CHANGE OF AREA STRUCTURE IN THE ITO, SHIZUOKA PREFECTURE AT MODERN AGES.
ーFOCUSING ON CHANGES IN THE DISTRIBUTION OF *RYOKAN* INNS.ー

宇於崎勝也[1]，　○赤澤加奈子[2]
Katsuya Uozaki[1], *Kanako Akazawa[2]

Focusing on changes in the distribution of *RYOKAN* inns in the Ito, Shizuoka Prefecture, from the end of the Meiji period through the start of the Showa period. This paper examines change of area structure of Ito, during the modern period..

１．背景と目的

静岡県伊東市は伊豆半島の最東端に位置し，中心市街地である旧伊東町の地域には，今日，旅館・ホテルが多数立地する海浜・温泉観光都市が形成されている．同地は近代以降，交通網の発展等を背景に観光地・保養地として大きく変容したことが窺え，近代期における変化は今日の地域形成の骨格を成していると考える．よって，同地の地域構造を把握する上で重要なものといえる．そこで本稿は，近代における同地の地域構造について新たな知見を得ることを目的とし，近代期発行の絵図・大縮尺地図その他文献史料を用い主要な構成要素といえる旅館に着目し，その立地分布の近代における変容について検討を試みる．

２．明治以降における伊東町の様相と交通網

明治 22（1889）年，新井村・玖須美村・岡村・鎌田村・松原村･湯川村は町村制施行により合併し伊東村となる．さらに明治 39（1906）年，町制施行により伊東町となる．交通の近代化は海上交通より開始する．明治 15（1882）年，伊豆各地の漁業従事者らによる汽船会社が設立し，東京と伊豆間における５日に一往復の運行が開始され，明治 22（1889）年になると東京と伊東間は毎日一往復運航されるようになる[1]．一方，同年に東海道線が静岡まで延伸され，東京からは馬車を乗り継ぐと一日で伊東に到着するようになる[2]．その後，明治 32（1899）年に豆相鉄道（後の箱根鉄道）が大仁まで開通し，明治 39（1906）年になると大仁と伊東の県道が開通される．さらに，大正 14（1925）年に東京と熱海間が直結すると，同年に熱海方面から伊東町の湯川・玖須美・新井の市街地を通過する県道が開通する．

一方，伊東町における明治 41（1908）年から昭和３（1928）年における職業構成は水産業が一位を占め，次いで商業，農業の順である[3]．また，明治 41（1908）年から明治 45（1912）年における静岡県内の町村別の平均漁獲高は伊東は焼津に次ぐ２位であり[4]，漁業地として有数の地位を占めていた．

温泉については，近世より主要な源泉であった玖須美の和田湯・松原の猪戸湯・松原の出来湯を利用した宿が立地していた．さらに周辺でこれらの源泉を引湯する宿が立地しはじめる．また，和田湯，猪戸湯周辺では源泉が自然湧出する場所がみられたことから，これらを利用し宿を開業する者が増加する．さらに，これらの地域内では共同湯が設置されていたことから，内湯を持たない宿も増加した．このように温泉として利用される源泉は自然湧出に限定されていた．しかし明治 33（1900）年頃より温泉源の掘削が導入され始めたことが指摘されている[5]．その後，開発範囲は拡大しそれに伴い源泉数は急増したことが指摘されている[6]．

３．近代期における旅館の立地分布の変容

図１の明治 43（1910）年『豆州伊東眞景』は，地元在住の稲葉廣吉により発行された鳥瞰絵図である．主要な建物・源泉・商店などとともに旅館の記載がある．絵図であることから不正確かつ主観的表現も含まれると推察

Table1. Development Of Transportation Network[7]

明治20(1887)年	国鉄、横浜-国府津まで開通
明治22(1889)年	国鉄、国府津-静岡まで開通 東京湾汽船、東京-伊東に寄港開始
明治29(1896)年	豆相鉄道、小田原-熱海まで開通
明治31(1898)年	相陽汽船、東京-伊東まで就航
明治32(1899)年	豆相鉄道、大仁まで延長
明治39(1906)年	大仁-伊東まで県道開通
明治41(1908)年	東京湾汽船、国府津-伊東まで就航
大正6(1917)年	伊東自動車、大仁-伊東まで営業
大正11(1922)年	国鉄、小田原-真鶴まで開通 東京湾汽船、真鶴-伊東まで就航
大正14(1925)年	国鉄、東京-熱海まで開通 熱海-伊東まで県道開通 東海自動車、熱海-伊東まで営業 東京湾汽船、熱海-伊東まで就航
昭和10(1935)年	国鉄、熱海-網代まで開通
昭和13(1938)年	国鉄、東京-伊東まで直通

１：日大理工・教員・建築　　２：日大理工・院（後）・不動産

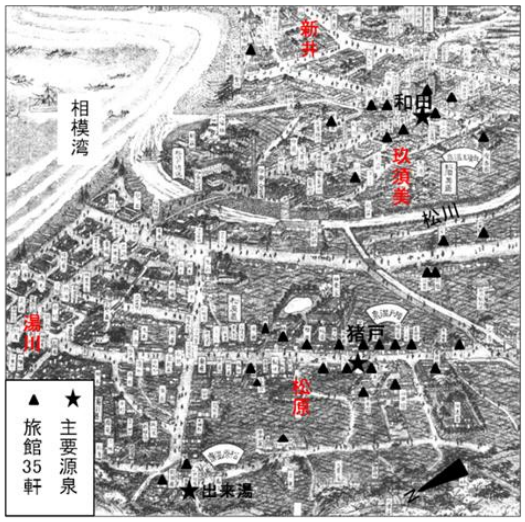

Figure1 Distribution Of RYOKAN INNS At End Of The Meiji Period[8)]

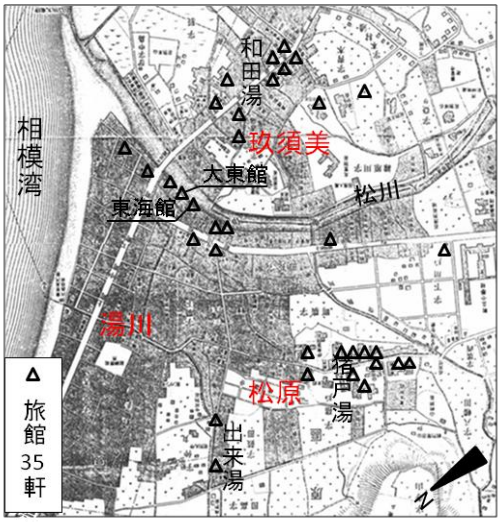

Figure2 Distribution Of RYOKAN INNS At Start Of The Showa Period[12)]

されるが，おおよその位置の把握は可能と考える．そこで当絵図より明治末期の伊東町における旅館分布について検討する．

図１より２級河川・松川が町の中心に貫流している．湯川・新井など海浜に近接した地域は，家屋や水産関係の商店などが密集し漁港町場が形成されている．一方，海浜に近接した場所で一部水田地帯がみられるが，当地帯は非常な低湿地帯であったことが指摘されており[9)]，宅地として不適当であったことが要因と窺える．旅館は 35 軒の記載がある．このうち主要源泉である和田湯，猪戸湯周辺でかつ交通の利便性の良い街道沿いで集積傾向がある．これらの場所は近世より旅館の集積地帯であったことは前述した．明治末期においても同地帯において引き続き旅館が集積している．

次に，昭和初期の伊東町における旅館分布について検討する．図２の昭和５（1930）年『伊東温泉場全図』は『伊東案内記』『伊東八景』などの多数の絵図，案内記の執筆，発行を手がけた地元の工務所により作製された．近代的な測量技術を導入した大縮尺平面図であり，主要な建物，商店，田地などとともに旅館の記載がある．当地図では 35 軒の旅館の記載がある．引き続き和田湯・猪戸湯周辺の街道沿いで集積傾向がある．一方，新たな場所として松川の川畔の河口や下流で旅館が集積するようになっている．当地帯は明治 43（1910）年『豆州伊東眞景』(図１)より，従前は田地のほか別荘が立地している．当絵図で松川は「松川の逍遥」などど記載され景勝地であった．また，当地帯は街道に近接し交通の利便性に優れている．なお，図２に記載がある東海館，大東館はともに松川に面した南面は客室，北側は玄関を配している[10)]．隣接する他の旅館も立地条件から，同様の造りが多数であったことが窺える．なお，伊東町では湯川を除きほぼ全域で源泉の掘削が可能で温泉資源は豊富であり[11)]この点は明治末期以降の源泉開発の増加や拡大に影響したことが窺える．このような背景を受け，松川畔は旅館立地として多数に選択されるようになったことが指摘される．

４．おわりに

本稿では，静岡県伊東の近代期における旅館分布の変容について把握した．まず明治末期の絵図による検討では，旅館は既存旅館街が形成されていた主要源泉周辺で，かつ交通の利便性に優れていた地帯で集積が認められた．一方，昭和初期の大縮尺地図による検討からは，これらの地帯に加えて新たに松川畔で旅館の集積がなされるようになる．明治末期頃より進行する源泉開発の急増の大きな要因と言える，町のほぼ全域で源泉掘削が可能であったことが背景となり，旅館立地の選択は自由化したことが窺える．これにより交通の利便性に優れ，かつ同地における景勝地である松川畔に面した地帯は，旅館立地として多数に選択されるようになり，新たな旅館街が発生した．これにより同地における既存の地域構造は大きく変化したことが指摘できる．

【注釈】
１）伊東市史編纂委員会（編）『図説　伊東の歴史』2009 年 pp158 より　２）同上　３）伊東町役場『昭和 14 年議事関係』（伊東市庶務課蔵）pp５より　４）前掲書『図説　伊東の歴史』pp155 より　５）武藤次郎『伊東沿革志』1940 年 pp72 より　６）伊東市教育委員会『伊東市史叢書３伊東温泉のうつりかわり』2011 年 pp15～17 所収『伊東市旧市内温泉源泉年次別分布図』より　７）本表は，伊東市教育委員会『私たちの郷土・伊東』1960 年 pp186～187 及び前掲書『図説　伊東の歴史』pp158 より作成　８）明治 43（1910）年『豆州伊東眞景』（伊東市立図書館蔵）の一部分を下図に作成，また旅館は屋号のみ記載のため前掲書『伊東沿革志』pp73 所収「明治期の旅館一覧」を参照．９）前掲書『伊東沿革志』1940 年 pp57 より　10)伊東賞受賞を祝う会『近代伊豆の名建築と歴史』2008 年（伊東市立図書館蔵）pp 記載なし，より　11）戦前における各温泉地の源泉数を比較可能な史料は不明であるが，前掲書『伊東市史叢書３　伊東温泉のうつりかわり』pp10 より，平成８（1996）年における温泉地の源泉数上位５箇所は別府（2,848 口）湯布院（804 口）伊東（529 口）指宿（463 口）熱海・伊豆山（435 口）である．12）昭和５（1930）年『伊東温泉場全図』の一部分（伊東市文化財管理センター蔵）を下図に作成，また旅館は屋号のみ記載のため前掲書『伊東沿革志』pp73 所収「昭和初期の旅館一覧」及び前掲書『伊東温泉のうつりかわり』pp154 所収「昭和５年伊東及び付近案内」を参照．